approach 02

社会的システムからのアプローチ

自分の立ち位置を確認する作業がファッションに与える影響とは？

良くも悪くも男のファッションにはルールがある。自己を主張するツールでありながら社会的立場を守らなければならない男特有のファッションの論理について服飾史研究家の中野香織さんに話を伺った。

男性は自分ひとりの判断で好きなものを着ることができない生き物だと思うのです。というのも、社会性を考えたときに、周囲や自分の立ち位置を計りながら生きて行くのが男社会。だから自分がいまどこにいるのか、どこまでお洒落していいのかを常に確認する必要がある。それに、立ち位置を見極めるために、同時代の社会という横軸だけでなく、歴史という縦軸の物差しも必要になるのが男のファッションの特徴。そこまで気にしなくてはならないのは、子どもを産むことによる確たる感覚を味わうことができない分、女性に比べて危うく感じているためではないかと思います。そんな状況のなかでアイデンティティーを確立しておくためにも、スーツという洋服が必要だったのかもしれません。いまにつながるスーツが着始められた頃、それまで身分や階級によって細分化されていたファッションに、横並びの空気が広がりつつありました。階級の違いや資産の多寡に煩わされることのないよう、同じ服を着て対等にビジネスや社交をしましょうと決まったことで、スーツにジェントルマンらしさ、のようなものが染み込んだのです。

そこに一石を投じたのがダンディと呼ばれる人たち。約束ごとと自分の立ち位置を押さえた上で、個性を差し込むことができたエドワード七世のような人をウエルドレッサーとするなら、一方で、大胆なチェック柄やウィンザー・ノットの祖とされる（このタイの結び目の命名者は部外者ですが）エドワード八世は周囲の反発を引き受けたダンディといえるでしょう。いずれも英国王室の人ですから、自信もあるし、地位もある。泰然としていられるからこそ、格好良くみえたということは、あるかもしれませんね。そういった彼らと同一化を図りたくなるのも男性特有の心理で、とにかく微に入り細に入り調べて、ルールやロジックにこだわる。そして、メンズファッションというルールのもとに張り合ったりする。それもひとつの文化ですが、スーツで張り合うことぐらい平和なこともないですけれどね（笑い）。結局、男のファッションに論理が必要というのは、自分がしっかり立っているためであって、横軸でも、縦軸においても、絶対的な自信がほしいからだと思います。

たかがファッションかもしれませんが、されどファッションのルールです。特にトップに立つような人は服のルールという些事を押さえておくことで、ビジネスでも些事をおろそかにしない人という信用を得られることもある。だから、客観的に自分の立ち位置とファッションを確認することは、社会的に生きるための最低限のたしなみだと思いますよ。

現代ファッションの礎を築いたダンディ

のちに英国王を退位してウィンザー公となったエドワード八世。氏が流行させたアイテムやスタイルはいまもなお熱く語られることが多い。プライベートでも愛される人生を選んだ生粋のダンディとして知られている。

機能と優雅さを実現したファッションリーダー

エドワード七世は60歳まで皇太子として君臨。ベストの下のボタンを留めない、パンツにクリースをつけるという習慣も彼が始めたもの。快適かつ機能的、優雅さを失わない「プラクティカル・エレガンス」を実現した。

中野さんいわく「私の永遠のアイドル」

「サー・ウィンストン・チャーチルは、四角い顔に、ポルカドットタイという自分で考えたスタイルを実践した人。欠点さえも愛嬌に変えてしまう魅力がありますよね。毒舌も欠点も含めて、人としての厚みを感じます」

中野 香織氏

Kaori Nakano

エッセイスト、服飾史研究家。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員などを経て、文筆業に。『モードとエロスと資本』（集英社新書）、『愛されるモード』（中央公論新社）、など著書多数。2008年4月より明治大学国際日本学部特任教授に就任する。

ダンディズムの系譜
男が憧れた男たち

華麗な装い、大胆な立ち居振る舞い、事に臨む態度で、氏素性に関係なく周囲をひれ伏せさせた各時代のカリスマたちの系譜を徹底解剖。
1200円・新潮選書